



で30年代には現在と同じ状況に安定した。しかしナガサキアゲハと違うのは北進の兆しが見え初めてから安定した密度になるまでに20年以上の長期間を要したことである。

ミヤマカラスアゲハ 1970年代より以前は完全に迷蝶扱いであったが、その後、神戸市内での採集報告が増え始め、80年代になってからは毎年採集されるようになり、現在では定着したものと考えられている。1950年以前に本種を採集するには、播磨と但馬の国境の山に入るか、氷ノ山の近くまで足を延ばす必要があり、名の通り深山の蝶であった。1960年代になると県内各地から採集報告が相次いだ。城崎郡香住町の海岸近くで、モンキアゲハに混じってクサギに次々と吸蜜に飛来するのを見たときは驚いた。でも、本種が南九州では海岸近くに生息していることを教えられ、特別に珍しいことではないことがわかった。1980年代に須磨浦公園でよく出会うようになって、もう驚きはしなかった。南九州ではハマセンダンやカラスサンショウで育つために沿海部にこだわって住み着いていると言われている。ハマセンダンのない神戸ではカラスサンショウを、深山ではキハダを餌にしている。本種が分布拡大を始めていることは間違いないところであるが、山奥から海岸近くに進出すると考えるのは、どうにも納得できない。幼虫の餌にしてもキハダをカラスサンショウに切り替えることにも疑問が残る。成虫の斑紋も神戸でとれたのは暖地産に特徴的な翅の裏面の白帯がはっきりしないものばかりである。このようなことから、山から降りてきたのではなく、モンキアゲハのように暖地の海岸に住んでいた系統が北進をはじめたとすると説明できるのではないだろうか。この仮説を証明するにはナガサキアゲハと同じように遺伝子を分析するのが早道と考える。また、安定した生息数もモンキアゲハやナガサキアゲハのように普通種並にまでなるのか、カラスアゲハ程度に落ち着くのか、現況が稍一杯なのか

予測は難しい。

オナガアゲハ 神戸産の標本は見たことがあるが、私は市内で観察の機会に恵まれたことがない。この理由は旧市内や市の西部には発生地がないからと考えている。本種は広域分布する普通種ではあるが、アゲハチョウやクロアゲハのように何処にでもいる蝶ではなく、産地が限定される傾向が見られる。何処の産地でも生息数は多いが、その産地を離れると急に見られなくなることがよくある。このことは本種が食草のコクサギに強く執着する性質があるからと推定されている。コクサギは六甲山の北斜面をはじめ北区の山地の谷筋に分布しているので、蝶を追っかけるより食草さがしを先にするほうが調査の効率が高いかも知れない。

ジャコウアゲハ 市街地で出会うことはないが近郊の林の中、藪の陰・川の堤防など予期しない所で鉢合わせする。ほかのアゲハチョウのように蝶道をつくることなく、出まかせに放浪するようだ。雌と出会ったとき、なよなよと何かを探すように見えるのでひょっとすると産卵かと期待をこめて探してもウマノズクサが見当たらないことのほうが多い。ウマノズクサは何処にでも生えている植物ではないが、堤防など生育環境のととのった場所では群落をつくることもある。そんなところに雌成虫がたどり着くと、局地的な大発生が始まることもある。私は明石川の堤防で観察する機会に2度も恵まれた。最初の出会いは1943年の夏から秋にかけてで、成虫の数はキャベツ畑のモンシロチョウ並みであった。開け放しの窓から部屋へ紛れ込むのは毎日のことであった。翌年は激減し、1945年には姿を見せなかった。同じ場所で1950年に再び発生が始まった。ウマノズクサは堤防の幅いっぱい約300メートルにわたって1-2メートルおきに点在し、ススキなど他の植物に多い被さって繁茂していた。この年の蝶の数は気になるほどではなく、本格的な発生は翌年1951年春からであった。しかし個体数は特に多い

という程ではなく5月から9月末まで堤防上で晴天の穏やかな日に数匹が飛び交う程度であった。

1952年の春から発生量が急増し、堤防を離れて周辺の田畑や集落地にまで飛来するようになった。8月以降は前回と同様に室内にまで侵入するほどとなり、この状況は10月上旬まで続いた。多発生はこれまでで終わり、1953年春には一頭の蝶も見ることがなかった。消滅の原因は食草の食い尽くしと、寄生蜂などの天敵活動によるものであった。あまりにも増えすぎた幼虫は餌を求めて路上にあふれ、葉を食い尽くされた莖の上では共食いが始まり、蛹までもが食われる飢餓地獄であった。運良く残った蛹もアゲハヒメバチなどの天敵に寄生され、翌春羽化できたのはごくわずかであった。ウマノズクサのダメージも激しく、回復するまで10年近くの年月を要した。再びジャコウアゲハが飛来して発生が始まったのは1970年であったが、運悪く河川改修工事が始まり、この産地は消滅した。ウマノズクサの生育環境が河川敷や堤防といった不安定な所とすれば、これに依存するジャコウアゲハの発生も不安定とならざるを得まい。したがって豊富な餌場に恵まれたとき増殖可能な限界をこえるまで増加を続け、食草を食い尽くして飢餓地獄に落ちる。ここで共倒れとならないように共食いすることによって最後の個体を羽化させる。でもこの成虫には産卵できる食草はないので産地を離れて行くしかない。最後の世代の旅立ちには当然のなりゆきであるが、ここに至るまでにある程度の高密度になった時点で産地をあとに旅立った蝶がかなりあったと思われる。大発生する害虫の場合には、ある密度になると飛び立つものと残留するものとに別れることが知られている。ジャコウアゲハの発生を見ると、これらの害虫の発生との共通点が目につく。神戸の市街地の近くにはウマノズクサやオオバウマノズクサ・アリマウマノズクサの生育する場所がいくつもあって、ジャコウアゲハはこれらを順次食い尽くしながら巡回するようにして発生を続けていたので

あろう。ウマノズクサはタフな植物で、地上部を食い尽くされても根から発芽する力が強く、かなり激しく食害されても絶滅することはない。しかし、近代の土木工事は規模が大きく、たいていの場合、植生は完全なまでに破壊されてしまう。残念なことに何処のウマノズクサも開発されやすい所あって、私の知っていた場所は今はない。

ギフチョウ 神戸のギフチョウの餌はヒメカンアオイで、この植物の生えているところでは結構住んでいたらしい。1935年頃までは現在の神戸大学のキャンパスあたりに産地があった話は有名であるが、今では伝説にすぎない。北区や西区の古くから知られた産地は現在も健在のようであるが、発生数の年次変動が大きく、発生の少ない年には絶滅かと、はらはらさせられる。

ウスバシロチョウ 六甲山で採集された古い記録があり、神戸の蝶のリストにいつも本種の名があげられているが、このことについては現在の知見では否定的である。兵庫県内の分布を見ても県の中央部の山中に限られ、近畿地区の産地も遠く離れており、飛翔力から見ても近隣からの飛来はとうてい考えられることではない。

エソスジグロシロチョウ 神戸にいても不自然とは思わず、標本の確認もせずに記載してしまったが、本当に産地があるのだろうか。もともとスジグロシロチョウと紛らわしく正確に同定するにはかなりの修練を要する。これまでの報告も標本を再確認しない限り信用し難い。兵庫県内では産地が局限されていてスジグロシロチョウのように何処にでもいる普通種ではないが、産地では個体数は少なくないようなのでじっくりと調査すれば採集の可能性は十分にあると思う。

スジボソヤマキチョウ 六甲山での古い採集記録があるので記載したが、本種も現在までの知見では否定的である。兵庫県をはじめ、近隣の府県の産地は遠く個体数も大変少ない。近畿地区では

希種あつかいであり、神戸で採集されたのが事実であれば迷蝶とすべきであろう。

**ツマグロキチョウ** 別にとりあげる程でなくて、いわゆる広域普通種であるが、神戸ではそう簡単に採集できる種類ではない。しかも採集できるのは、殆ど秋になってからで、私も神戸市内で夏型を観察していない。夏型の蝶はカワラケツメイのある広場にいて個体数も少なくはないが、産地を離れて飛び立つことをしない。したがって、飛来する蝶を待ち受けるだけでは移動タイプの秋型しか見ることができない。カワラケツメイの生える場所は河川敷や堤防、田畑の畦畔などの人為的不安定で開発されやすい環境にあるので、本種の産地は常に移動していると推定される。

**シルビアシジミ** 神戸を産地として記載して、誰も異議をととなえないと信じて記載した。ところが、1984年に勝屋氏が本誌上に舞子の産地が開発で消滅したことを報告されたのを見て急に不安になった。本種も人為環境に生育するミヤコグサの群落に依存しており、他に餌となるヤハズソウやコマツナギにしても似たような場所に生えている。したがって開発により、あっと言う間に産地は消滅する。幸いなことにミヤコグサはタフな植物で開発されてもいち早く回復する。また近年帰化したセイヨウミヤコグサも増加している。シルビアシジミが生活力の強靱な蝶であれば開発で産地を追われても数キロメートルの範囲で産卵できる餌にたどりつける筈である。丹念に調査すれば新しい産地が見つかるかも知れない。

**ムラサキツバメ** 四国や九州の暖地に住む蝶で、神戸では迷蝶あつかいが無難と思われる。でも思いがけない所からの採集報告が結構あって論議的になっている。一番有力なのは街路樹としてマテバシイが九州の産地から運ばれることが多く、これに付いてきたと言う説である。本種はマテバシイ属のマテバシイとシリブカガシだけが食樹で

これらの樹種の豊富な場所でないと住み着くことは難しい。これまでに関西で採集されたのは、本種が秋遅くに越冬地を求めて移行飛翔する性質があることを重く見ていた。しかしこの説では本種の飛翔力から見て産地からの距離がありすぎるように思えてならない。ちなみに私の見た標本は西区の大開発地の中心にある西神中央駅前で大嶋範行氏が1992年6月に採集された雄であった。また近辺にはマテバシイがかなり植栽されているという。なお兵庫県内では越冬は確認されていない。

**クロシジミ** 全国的に見ると本種は局地的に分布する種とされる。神戸市は多産地とまで言えなくとも北区や西区では珍しい蝶ではない。でも最近になって何処へ行けば観察できるのかを尋ねられるようになった。そういえば私の観察地点であった須磨区の産地は開発で失われていた。本種は典型的な雑木林の蝶で、クロオオアリが住んでいてアブラムシやキシラミの発生が多い樹木が必要とされている。これはかなり微妙なバランスのとれた環境であり、ちょっとしたことで壊れてしまいそうである。珍しくもないからと安心してしたが、ひょっとして危機が迫っているかも知れない。

**ダイセンシジミ** 古くから神戸に発生地のあることが有名であった。その多くは開発によって失われたが、六甲山系のなかに僅かに残されているらしい。

**ウラキンシジミ** 本種は神戸市をはじめ兵庫県南部一帯の低い山地のあちこちに発生地があって観察するのは難しくはない。古い記録だが神戸市の鷹取山に多産地があった話は有名であった。市内での多産地は殆ど失われたが、食樹のマルバアオダモは何処にでもごく普通に見られるので、丹念に探せば新しい産地を発見する可能性は多分にあると考えられる。

**クロツバメシジミ** 食草がペンケイソウ科の植物だけと言う変わった食性の為に分布も飛び飛び

で、しかも狭い所に局限されている。神戸にも古くから有名な産地が北区にあり、断崖に育つツメレンゲを餌としている。現在のところ開発とは無縁であるが、ツメレンゲがその珍奇な姿から山草家から狙われやすく、兵庫県版レッドデータブックにもあげられ保護を求められている植物となっている。蝶マニアもさることながら、おそろしいのは山草マニアとは困ったことである。

**アサギマダラ** 春から夏までの間に姿を見せなかったのに、突然9月下旬から10月にかけて多くの蝶が飛来する年がある。本種が長距離飛行をすることが明らかにされて疑問が解けた。神戸の山中で秋に見られる蝶たちは南国への旅の途中らしい。この蝶は食草さえあれば幼虫で越冬できるが、神戸では自然状態での越冬は確認されていない。市内で冬に落葉しないガガイモ科のイケマを植えて産卵させて観察を続けたところ若令幼虫で越冬したと言う話を聞いたことがある。残念なことに神戸ではイケマはかなり珍しい植物のようでアサギマダラを養うほど存在しないようである。

**オオウラギンヒョウモン** もともと産地が局限されていて、何処でも見られる普通種ではなかったが、発生地では個体数はわりに多くて採集はそう難しくはなかった。神戸にこのような産地があったのかは不明で、ただ古い記録に六甲山が産地としてあげられているだけで、本当に土着していたのか現況では探索のしようもない。兵庫県内のわずかに残された産地での近藤伸一氏の観察報告によると、本種の食草はスマイレで代表される無茎スマイレ類だけで、他のスマイレ類では育つことができない。全国的に見てもスマイレの育つ草原や草地の衰退が激しく、オオウラギンヒョウモンの復活はかなり難しいようである。神戸市内では本格的な草地はもともと存在せず、僅かに残る草地だけでは、今後この蝶がリストにあげられる可能性は殆どないと考えられる。

**オオウラギンズジヒョウモン** 本種も神戸では稀種であったが、どうしたことか1975年頃から他のヒョウモンチョウに混じって六甲山あたりで見かけるようになっていた。この現象は神戸だけでなく兵庫県のほぼ全域で観察されており、県の中央山地の草原でウラギンヒョウモン並みのところがあった。これは一時的な現象で1980年を過ぎる頃から再び少なくなってしまった。オオウラギンヒョウモンほど草原に執着しないように思えること以外に本種の盛衰について考察できる資料は全く持ち合わせない。

**ウラギンヒョウモン** 1960年頃までは六甲山系の何処へ行っても採集できるごく普通の蝶であったのに、年々減少し1980年代以降は稀種の仲間に入れたほうが適切な感がある。この現象は神戸だけでなく全国的な傾向で、しかもその原因はよくわかっていない。オオウラギンヒョウモンの衰勢は生息地の草原の壊滅にあると言う説は納得できるが、本種をはじめクモガタヒョウモン・メスグロヒョウモン・ウラギンズジヒョウモンまで少なくなったのは草原の荒廃だけでは説明できない。

**ミドリヒョウモン** 本種も他のヒョウモンチョウと同じように減少しており、神戸では羽化の最盛期の6月でも見かけることは少ない。ところが10月の穏やかな晴天の日、市街地に多数飛来する年がある。このような現象は1940-50年頃のヒョウモン類の多かった時代にはごく普通であった。でもこれらの蝶が何処から飛来するかはよくわかっていない。

**ツマグロヒョウモン** 他のヒョウモン類が普通にいた頃は本種は珍しい存在であった。今では逆転して市街地で飛翔するヒョウモンは本種ばかりとなっている。増加しはじめたのは1970年代からで、普通種あつかいにされるまで約20年を経過している。しかし越冬できる幼虫は少ないようで春以降の発生は暖地から飛来する母蝶に由来するの

が主体かもしれない。

**コミスジ** ごく普通の蝶で、市街地でもなじみの深い種類であった。ところが近頃ではあまり見かけなくなっている。産地が局限されることなく、幼虫の餌となるマメ科の植物は豊富にあり、発生するための環境に大きな変化があったとは考えられない。このような個体数の大きな変化は他の普通種の蝶でも観察されている。前述のヒョウモンチョウ類がそうであり、ウラギンシジミやムラサキシジミの場合1955年頃減少に気がついたが低密度の状態は1970年頃まで続いたように思う。

**ホシミスジ** コミスジの減少と対照的に増加し、市街地に舞うミスジは殆ど本種と見て間違いはない。もともと本種の発生地は局限されていて、何処にでもいる種類ではなかった。神戸の須磨が産地として古くから知られていたが、生息数は現在ほどには多くはなかった。目立ち始めたのは1960年頃からで、今では場所によってはモンシロチョウなみになっている。増加の原因は見当がつかない。これまで増加した蝶は、ナガサキアゲハ、モンキアゲハ、ツマグロヒョウモンなど熱帯系統の種類で気候の温暖化で一応の説明ができた。しかし本種の場合は高原の蝶のイメージが強い。高原とまでいかなくとも、れっきとした温帯系の蝶であり、自然環境の悪化の嘆かれる市街地で繁栄する意外性が驚きである。兵庫県下の他の産地は標高の200メートルばかりの低山地で、バラ科のイワガサなどで育っている。これに対して市街地ではコデマリやユキヤナギを餌としている。これらは庭園ばかりでなく街路樹としても植えられているので食樹はふんだんに存在している。このことを多発の原因とする説があるが、一因ではあるがそれですべてを説明できるものではない。

**ミスジチョウ** 山地性の蝶と考えられているが、なぜか近畿地方では低地でも発生している。神戸では六甲山を山地として記録されていたが、かな

り珍しい存在であった。ところが最近では山麓の住宅地に出没するようになっており、羽化期の6月に市街地にまで飛来することがある。近藤伸一氏によると六甲山とその周辺でモミジ類を採せば越冬幼虫が結構見つかるという。

**サカハチチョウ** 六甲山を産地とする古い記録はあるものの、定住については否定的であった。兵庫県内の産地は県中央の山地で神戸まで飛来するには遠すぎる。ところが1954年頃から北摂津の能勢に定住が確認され、本種の分布拡大が話題となっていた。いつかは六甲山に出現するものと予測されていたがその時期は意外に遅れ、ようやく1992年8月に西隆広氏により採集された1頭の雄が初めての記録となった。同氏によりその後も採集されているので土着は近いと思われる。

**ヒメアカタテハ** 神戸で越冬する確証がとれていないので土着種として記載できなかったが、ごく最近に市内で幼虫の越冬が確認できたとの情報を得た。汎世界種と言われる普通種でありながら、日本での生態についての調査は最近まであまり行われていなかった。確認をしないままに成虫で越冬するものと信じられ、図鑑類にもそのように解説が記載されていた。成虫の耐寒性は強くなく、神戸では12月末までに死滅するようである。4月には成虫が花壇に飛来するが市内で羽化したものか、暖地から飛来したものか判別はできない。食草が何処にでも生えているヨモギやハハコグサであり、畑のゴボウでは幼虫がよく見つかるのでいつも気をつけていたが、私には越冬確認のチャンスに恵まれていなかった。

**イシガケチョウ** 神戸市史の中で迷蝶と記載した。ところがその後採集報告が相次ぎ、私自身も1989年12月と1995年・1996年のいずれも6月に諏訪山公園で採集している。近隣の産地から母蝶が飛来してくるのか、或いは神戸に土着しているのかは早急な結論はだせない。しかし食樹のイヌビ

ワは豊富にあり、最近の暖冬の持続から見て土着の可能性は十分あると思われるが、越冬や常習的な発生地は未だに確認されていない。

**オオムラサキ** 50年も前の話になるが、神戸電鉄山の街駅の西を500メートルも行かないうちにオオムラサキはいた。一面ネザサに覆われた緩やかな斜面にクヌギやアベマキが点在し、家は一軒も見あたりはしなかった。素手で掘める程にいた年もあれば、探しあぐねてようやく一匹の年もあった。現在は住宅地のご真ん中である。本種に限らず貴重な生物の産地がこのように幾つも破壊したに違いない。オオムラサキは気むずかしい蝶で食樹のエノキがあるだけでは育ててくれない。自然の豊かな里山で、さらに種々の条件が整って、初めて住み着くことができる。六甲山系の再度山の教育の森で自然飼育が成功し、麓の諏訪山公園にまで飛来する年もある。

**メスアカムラサキ** 迷蝶の代表的な種類で、発見頻度の割合高い蝶であり、母蝶が飛来し世代を重ねることも珍しくはないと言う。兵庫県では私が明石で1957年8月に見た雄が最初であった。神戸では1959年9月に垂水で1雄が、ついで1964年7月に須磨で1雌が採集されている。その後しばらく採れた話は聞いていなかったが、1982年10月に成虫と幼虫が鏝子で勝屋潤氏によって観察された。本種は純粋に熱帯の蝶で、亜熱帯に属する八重山諸島でも土着が疑問視される程なので、神戸に定着することはないと考えられる。

**クロコノマチョウ** 1950年頃から兵庫県内からの採集報告が増え始め、神戸でもここ十年ほどは毎年何処かで採集されている。これほど採集されていることから土着は間違いないと思われるが、春から夏までの採集報告がない。越冬した蝶も、次の第一世代の蝶も見つかっていない。これを確認しない限り定着したと宣言するわけにはいかない。

**ウスイロコノマチョウ** クロコノマチョウに引きずられるように採集報告が増えている。私がさきに神戸の蝶を纏めたとき、正確な採集記録が見当たらなかったのが記載しなかった。ところがその後つぎつぎと採集されはじめ、私も1988年9月と10月に須磨で1頭ずつ採集した。近藤伸一氏の報告によると1993年は近畿各地で多発し、神戸でも伊川谷で18頭も採集できたという。本種の耐寒性はクロコノマチョウより弱く、土着は奄美以南とされているので、神戸で見られるのは明らかに迷蝶で越冬はできないと考えられている。

**ヤマキマダラヒカゲ** 六甲山にいても当然のことと思い、確認もせず神戸の蝶として記載した。本種の兵庫県内の分布を見ると、決して何処にでもいる種類ではなかった。気になって私の標本を点検したら神戸産のラベルはすべてサトキマダラヒカゲであった。蝶仲間にも聞いても確実に神戸のヤマキマダラの返事がかえってこない。山中でキマダラに出会ったら片端から再確認の必要がある。

**ヒメヒカゲ** 草原にすみ、しかも局地的な分布をするので、常に絶滅の危機にさらされている。神戸も分布域にあり産地が点在していたが、その多くは開発によって失われてしまった。採集報告を見てもその記録は20年以上も古く、その産地はすでに消滅している可能性が高い。早急に生息地の調査が必要と考える。

**ウラナミジャノメ** 普通種のように見られがちであるが、神戸では産地が局限されていて、何処にでもいる種類ではない。本種も衰退の気配がありヒメヒカゲほどの危機感はないが、詳細な調査が必要と考えられている。私のもつ標本を点検したところ1959年に西区神出町で採集したのが残されていた。その後の採集ではヒメウラナミジャノメだけとなっている。ここ数年注意しているが採集の機会に恵まれていない。

**ギンイチモンジセセリ** 関西ではごく限られた狭い地域にしか見られない局地分布種で、北区道場町が古くから知られていたが神戸ではここ以外に産地は無い。私は観察の機会に恵まれていないが、最近の情報では健在のようである。元来が草原の蝶なので、環境の変化に弱いのではと危惧されていた。しかし姿に似ず案外にタフな性質のようで、堤防や河川敷といった小さな草地でも生存できそうなので、大きな開発がない限り安泰であろう。

**ヘリグロチャバネセセリ** 近畿の都市圏周辺の山々に局地的に分布するので神戸で採集されても不自然ではない。しかし私は今までに神戸で採集された標本に接したことがなく、数人の虫友に聞いてもはっきりした返答が帰ってこない。兵庫県中央部の産地には広く分布し、時期さえ誤らなければ会うことはそう難しいことではない。ところが低山地では個体数が少なく、産地として知られた所でも毎年採集できるとは限らないと言う報告もあり、発生地の確認にはかなり入念な調査が必要であろう。

**チャバネセセリ** イチモンジセセリとともに夏過ぎから市街地の花壇におなじみの蝶なのに、その生態が十分に把握できていない。6月から飛来する年もあるが、たいていは秋風とともに出現する。年によるとイチモンジセセリより多いことがある。神戸で越冬できているのかは全く不明で、第一世代が何処で育っているかも分かっていない。第二世代幼虫は水田でイチモンジセセリとともに普通に見られ、これらが羽化して秋の花壇に飛来するのであろう。

**ミヤマチャバネセセリ** 発生地がせまく限定され、個体数も少ないので観察できる機会が少ない。ところが分布域が広いのと、成虫の出現期が4月から9月に及ぶせいか、思いがけない所で出会うことがある。しかし出会いの場所が発生地でない

ことが多く同じ場所で見るとはめったにない。そのようななかで北区道場町は再会のチャンスの多い場所で、堤防や河原のススキ・チガヤが発生源と推定される。

**迷蝶** 定住地でないところに迷いこんでくる蝶のことで、遅よく採集できた蝶マニアにとっては大事件であり、早速写真つきで昆虫関係の雑誌に発表されるのが慣習となっている。とくに発生地が外国の蝶の場合には、直接に本人が採集しなくても報告されることがあり、蝶マニアの目にふれたものは細大漏らさず発表されていると考えても差し支えないくらいである。

神戸市内で採集されたとする迷蝶の記録もかなりの件数となっているが、これらを前にしてどのように整理し記載するかについて、いつものことながら困惑せざるを得ない。メスアカムラサキとウスイロコノマチョウの2種は神戸市内で一時的であるにしろ世代を繰り返したことが確認されているが、両種ともに寒さに弱く神戸で越冬できるとは考えられない。したがってこれらは迷蝶の定義にぴったり当てはまる。次にイシガケチョウとクロコノマチョウが迷蝶あつかいとするか、土着種と認めるかの境目にある。年々採集個体が増えていて土着していても不思議はないが、越冬の確認が採れていない。両種ともに成虫で越冬するが、越冬明けの蝶が発見されていないし、またたとえ採集できたとしても、これが当地で越冬したという証拠は無く遠いところから飛来してきたのかも知れない。ところで、神戸で越冬が確認されておらず、またその可能性のないウラナミシジミも迷蝶にいれてもよいものだろうか。アサギマダラ・チャバネセセリ・ツマグロヒョウモンは丹念に探せば市内での越冬地が見つかる可能性はあるが、次世代につなげるのは当地で越冬したものより遠方から飛来したものの方が有力のような感じがする。

上記以外に神戸市内で採集されたと発表された



蝶のなかで熱帯起源のカバマダラ・アオタテハモドキは近隣の府県からも採集されていて、一時的な発生までもが報告されているので驚きはしない。しかしやっかいなのが現在までの調査で分布域が限定され、本来の発生地とは考えられない蝶の採集報告のあつかいである。神戸を採集地としたものにキベリタテハとクジャクチョウがある。両種ともに伊吹山あたりを分布の西限としているので、神戸で採集されたのは迷蝶とすべきであろう。スジボソヤマキチョウとウスバシロチョウは神戸の周辺に産地はなく古い記録だけしかないが、もしも近年に採集されているとすればやはり迷蝶である。

最もやっかいなのは同定の誤りがある。記載があるものの標本が残されていない場合、確認のしようがないが、古い記録のなかによくある。現在ではどこの雑誌も発表のまえにベテランが必ずチェックするシステムをとっているので過ちは少なくなっている。神戸の迷蝶のなかでシータテハ・ギンボシヒョウモン・サツマシジミはその疑いが十分にある。その他に、ラベルの取り違いや勘違いも無いとは言えない。

#### 神戸の蝶

##### (アゲハチョウ科)

ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、キアゲハ、アゲハチョウ、オナガアゲハ、クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ

##### (シロチョウ科)

キチョウ、ツマグロキチョウ、モンキチョウ、ツマキチョウ、モンシロチョウ、スジグロシロチョウ

##### (シジミチョウ科)

ムラサキシジミ、ウラゴマダラシジミ、ウラキンシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミスイロオナガシジミ、ダイセンシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、トラフシジミ、コツバメ、

ベニシジミ、ゴイシシジミ、クロシジミ、ウラナミシジミ、ヤマトシジミ、シルビアシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、クロツバメシジミ、ウラギンシジミ

##### (テングチョウ科)

テングチョウ

##### (マダラチョウ科)

アサギマダラ

##### (タテハチョウ科)

ウラギンスジヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン、ミドリヒョウモン、クモガタヒョウモン、メスグロヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ツマグロヒョウモン、イチモンジチョウ、アサマイチモンジ、コミスジ、ホシミスジ、ミスジチョウ、サカハチチョウ、キタテハ、アカタテハ、ルリタテハ、ヒメアカタテハ、スミナガシ、コムラサキ、ゴマダラチョウ、オオムラサキ、イシガケチョウ

##### (ジャノメチョウ科)

ヒメウラナミジャノメ、ウラナミジャノメ、クロヒカゲ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ、ヒメジャノメ、コジャノメ、ヒメヒカゲ、クロコノマチョウ

##### (セセリチョウ科)

ミヤマセセリ、ダイミョウセセリ、アオバセセリ、キマダラセセリ、コチャバネセセリ、オオチャバネセセリ、チャバネセセリ、ミヤマチャバネセセリ、イチモンジセセリ、ホソバセセリ、ギンイチモンジセセリ

##### (迷蝶)

ムラサキツバメ、カバマダラ、メスアカムラサキ、アオタテハモドキ、キベリタテハ、クジャクチョウ、ウスイロコノマチョウ

##### (疑問種)

ホソオチョウ、スジボソヤマキチョウ、ヘリグロチャバネセセリ、ウスバシロチョウ

(YAMAGUCHI HUKUO 神戸市須磨区神の谷3-6-4)